

# どんな経験も

# 子どもたちにとって

# 刺激になる

活躍する  
先輩たち

VOL.8

岡崎市立六名小学校教諭

田中章太郎さん



田中章太郎さん(たなか・しょうたろう)

1988年愛知県生まれ。2011年3月大学卒業後、愛知教育大学大学院に進学。13年に教員採用試験に合格し、翌14年4月から岡崎市立六名小学校に赴任。19年度は1年生担任を務めた。

## 大

学では経営学専攻です。「教員になろう」とは考えていません

でした。きっかけは大学4年時の夏季集中講座です。担当が特別支援学校の校長も兼任する教授で、遅刻をしても、頭ごなしに否定したりせず、その理由をしっかりと聞いてくれる人でした。

それまで、学校の教員は、「集団」に教えるイメージでしたが、一人ひとりの子どもと向き合い、支えるのが教員だと気付かされたんです。最終日、「うちの大学院を受けてみたら」と声をかけてもらい、その先生がいた大学院への進学を決めました。教育実習は大学院2年の時に

大学の附属小学校に行きました。授業中もそれ以外でも、教員の発問や指示の仕方が、子どもたちの発言や行動にすごく影響することを知りました。例えば、教室の机が整っていない時、その前の声かけが「ちゃんと並べて」なのか、「一つ前の机と左右を揃えよう」なのかで、子どもたちの反応が違っています。教室にトラブルはつきものですが、「子どもにはよくあること」と片付けるのではなく、自分の声かけが適切だったか振り返る癖ができました。

教員採用試験を受けたのは大学院3年の時です。学会参加のための出張も多く、試験準備にはあまり時間はかけられませんでしたが。満点を狙うのではなく、効率重視で苦手な部分にとりくみ、無事合格できました。

教員1年目は、同時に赴任した同期に比べて失敗ばかりでした。授業後、職員室に戻ると、机に付箋が貼ってありました。授業を見に来た校長先生の指導がびっしり書き込まれているんです。それを見て、「次こそ上手くやろう」と思ったものです。

今は、授業を通じた学級経営を意識しています。授業中、で

きるだけ子どもたちに発言させるんです。教員が話せば話すほど、子どもたちは食いつかないですから(笑)。「あなたは どう思う?」と、授業の中で何度も問いかけます。これなら、勉強が苦手だったり、自信がなかったりする児童も、授業に参加しやすい。結果として、喧嘩やトラブルが減り、叱ったり注意したりする回数も減りました。授業後、子どもたちの意見や考えで埋まった黒板の様子を学級通信に載せると、「うちの子、ちゃんと発言してる」と保護者も安心します。続けるうちに、自主的に発表したり、行動したりできる子も増えていきました。

教員は、どんな経験も生かせる仕事だと思います。人にできないことが少しでもできれば、子どもたちの刺激になります。

私自身、学部学生の時はいくつものアルバイトをしたり、バンドを組んだりしました。その経験は、動画教材の作成や学校行事で使うオリジナルソングの作曲など、思わぬ形で生きています。みなさんには、ぜひ、学生のうちに、教員になるための勉強だけでなく、色んな経験をしてもらいたいと思います。